

総合公園の利用者意識による心理的評価構造の検討

前橋工科大学大学院 ○学生会員 岩間 佳之
前橋工科大学 正会員 湯沢 昭

1. はじめに

我が国では生活水準の向上と自由時間の増加により、社会的欲求が拡大多様化している。このような生活基盤の向上とモータリゼーションの発展により、国民のレクリエーションの場である公園の利用がされている。しかし、総合公園利用者の内在する価値は認識されていない。

そこで、本研究では地方都市の都心部に位置する総合公園の利用者意識による心理的評価構造に着目して研究を進める。心理的評価構造を定量的に把握し、検討することにより利用者が総合公園の利用により得られる心理的価値を把握することを目的とする。

2. 調査概要

(1) 対象公園の選定

本研究では群馬県前橋市の都心部に位置する前橋公園とした（図-1）。

前橋公園は明治8年に日露戦役の記念をかねて建設された前橋市最初の総合公園で、利根川を眼下にし、榛名山・浅間山・妙義山の山並みを望む絶景の場所にある。園内には、昭和34年皇太子殿下のご成婚を記念して、鶴舞う形の群馬県をかたどった「さちの池」をはじめ、「芝生広場」、「前橋るなばあく」、「親水・水上ステージ」、県・市指定重要文化財の「臨江閣」、「ひょうたん池」などがある（図-2）。

(2) アンケート調査

前橋公園の心理的評価構造を把握するため、2004年5月3日、4日に公園利用者に対し、直接配布、後日郵送回収方式でアンケート調査を行った（配布枚数1100枚、回収枚数304枚、回収率27.6%）。調査項目は「Q1：個人属性」、「Q2：公園の利用状況」、「Q3：公園施設の感想」、「Q4：公園の満足度」、「Q5：公園利用後の感想」である。

(3) 総合公園の心理的評価構造

利用者による総合公園の心理的評価構造は、アンケート調査の「Q5：公園利用後の感想」より得られた評価項目のデータを基に、公園利用により得られる心理的価値について共分散構造分析を適用し、公園の総合評価及び公園の再利用意思に及ぼす影響を検討する。

また、図-3はアンケート調査の「Q1：個人属性」より得られたアンケート調査回答者の性別と職業を表した



図-1 前橋市の前橋公園



図-2 前橋公園の施設概要

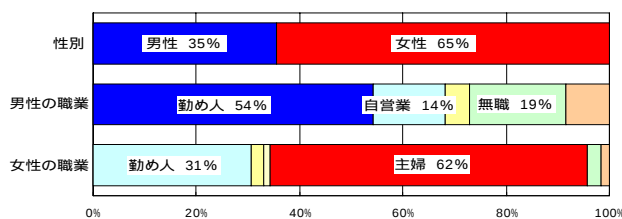


図-3 アンケート調査回答者の性別と職業

ものである。回答者の性別は男性35%、女性65%となった。職業は男性の68%が勤め人もしくは自営業で、女性の62%が主婦となった。男性と女性では総合公園の利用意識に差があると考えられることと、職業の比率が異なるため普段の生活を考慮した場合、休日の総合公園の利用意識に差があると考えられるため、男性及び女性において総合公園の心理的評価構造を比較及び検討する。

キーワード：総合公園，利用者意識，心理的評価構造

連絡先：〒371-0816 群馬県前橋市上佐島町460-1

前橋工科大学工学部建設工学科 TEL/FAX：027-265-7362

E-MAIL：yuzawa@maebashi-it.ac.jp

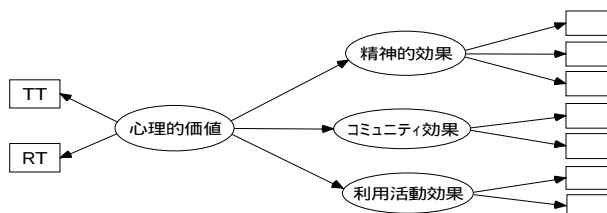


図-4 心理的価値の評価モデル

表-1 潜在変数と観測変数名

観測変数	潜在変数	観測変数
TT:公園の総合評価	精神的効果	ストレス解消
RT:公園の再利用意思		のんびり感
		気分転換
	コミュニティ効果	家族・友人とのふれあい
		楽しい時間
	利用活動効果	自然とのふれあい
		運動不足の解消

3. 総合公園の心理的評価構造

(1) 共分散構造分析による総合公園の心理的評価構造

図-4は、共分散構造分析を適用したパス図である。パス図は、公園利用により得られる潜在変数「心理的価値」が存在すると仮定し、「心理的価値」によって公園の総合評価及び再利用意思が決まるものと仮定した。次に、「精神的効果」、「コミュニティ効果」、「利用活動効果」の3つの効果が「心理的価値」より得られると仮定し、潜在変数として配置した。また、表-1にパス図の潜在変数と観測変数名を示した。図-4のパス図においてアンケート調査より得られたデータを用いて共分散構造分析を行う。

(2) 共分散構造分析による分析結果

表-2は、図-4のパス図において前橋公園のアンケート調査回答者のデータをもとに共分散構造分析を適用し分析した結果である。各パス間の影響は全てが有意水準1%を満足しており、適合度指標はGFI=0.934、AGFI=0.877であり、全体的に良好な値を示した。また、結果より重要度を求め検討を行う。ここで、重要度とはパス係数の積とする。本モデルでは、「心理的価値」から「TT:公園の総合評価」への影響を1.00としたものであり、「RT:公園の再利用意思」への影響は0.88となった。結果より「心理的価値」への影響は「精神的効果」の影響が最も大きく、重要度より「のんびり感(1.56)」が最も影響を与えており、次いで「気分転換(1.55)」、「ストレス解消(1.46)」となった。また、「運動不足の解消」の重要度が0.73と小さいことが分かった。

表-3は図-4のパス図において性別に分析した心理的評価構造の結果である。男性女性ともに各パス間の影響は全てが有意水準1%を満足しており、男性の適合度指標はGFI=0.914、AGFI=0.845であり、女性の適合度指標はGFI=0.919、AGFI=0.847であり、全体的に

表-2 重要度の計算結果

潜在変数	パス係数	潜在変数	パス係数	観測変数	アンケート項目	重要度
心理的価値	1.46	精神的効果	1.00		ストレス解消	1.46
			1.07		のんびり感	1.56
			1.06		気分転換	1.55
	1.06	コミュニティ効果	1.00		家族・友人とのふれあい	1.06
			0.90		楽しい時間	0.95
	1.36	利用活動効果	1.00		自然とのふれあい	1.36
			0.54		運動不足の解消	0.73

表-3 男女別重要度の計算結果

男性						
潜在変数	パス係数	潜在変数	パス係数	観測変数	アンケート項目	重要度
心理的価値	1.51	精神的効果	1.00		ストレス解消	1.51
			1.16		のんびり感	1.75
			1.07		気分転換	1.62
	1.20	コミュニティ効果	1.00		家族・友人とのふれあい	1.20
			0.82		楽しい時間	0.98
	1.84	利用活動効果	1.00		自然とのふれあい	1.84
0.48				運動不足の解消	0.88	

女性						
潜在変数	パス係数	潜在変数	パス係数	観測変数	アンケート項目	重要度
心理的価値	1.38	精神的効果	1.00		ストレス解消	1.38
			1.04		のんびり感	1.44
			1.08		気分転換	1.49
	0.98	コミュニティ効果	1.00		家族・友人とのふれあい	0.98
			0.95		楽しい時間	0.93
	1.08	利用活動効果	1.00		自然とのふれあい	1.08
0.63				運動不足の解消	0.68	

良好な値を示した。また、「心理的価値」から「TT:公園の総合評価」への影響を1.00とし、「RT:公園の再利用意思」への影響は男性1.05、女性0.83となった。結果より「心理的価値」に及ぼす影響が大きい潜在変数は、男性では「利用活動効果」、女性では「精神的効果」であった。また、重要度より男性では「自然とのふれあい(1.84)」が最も大きく、次いで「のんびり感(1.75)」、「気分転換(1.62)」となった。また、女性では「気分転換(1.49)」が最も大きく、次いで「のんびり感(1.44)」、「ストレス解消(1.38)」となった。

以上の結果より、女性は「精神的効果」の3つの項目の「心理的価値」を得ることができることにに対し、男性は「利用活動効果」の「自然とのふれあい」が最も大きく、次いで女性と同様「精神的効果」の「心理的価値」を得ることができることが分かった。従って、男性と女性の総合公園利用により得られる「心理的価値」の違いがあることが分かった。これは、男性の半数以上が勤め人や自営業であり休日の自然とのふれあいの時間を大切にしていると考えられる。また、女性の半数以上は主婦であり普段の生活では得ることのできない精神的効果を得ることができたと考えられる。

4. まとめ

本研究では、地方都市の都心部における総合公園の利用者意識による心理的評価構造に着目し、公園利用後の感想より、総合公園の利用により得られる心理的価値から公園の総合評価、公園の再利用意思への影響を把握した。また、性別に分析したことにより心理的価値の違いを把握した。評価構造をモデル化したことにより総合公園の心理的評価構造を定量的に把握することができた。